

認知症の今

DEMENTIA Now

広井先生の基本的な関心は、大きくは「人間についての探求」と「社会に関する構想」を架橋することだと言われています。先生のお母さまが認知症になりました。先生はそのお母さまと接し考察することを通して、これまでより、ひと回り大きな視点から認知症の見方を考え直していくことの重要性に気が付かれました。今回は、広井先生の「老年的超越」の言葉に代表される認知症の見方についてご執筆いただきました。

認知症と「老年的超越」

京都大学こころの未来研究センター教授 広井 良典

認知症の人は半分“夢の中の世界にいる”

私の実家（岡山）にいる母親は今年89歳になるが、何十年も続けてきた商店——地方都市の例に漏れず半ばシャッター通り化している商店街の一角にある——を数年前に店じまいしたこともあってか、少し前から現れていた認知症の症状が一層顕著になってきた。

当初は、かなり以前に亡くなった両親や、10年ほど前に亡くなった夫（つまり私の父）は今どこに行っているのか、なかなか帰ってこないではないか、といった趣旨のことを時折話していたが、最近はそうしたことを言うこと自体も少なくなり、たまに幼少期の幼なじみの友だちのことを口にする程度になっている。

そのような母親の言葉を聞いていると、あ

る意味で半分“夢の中の世界にいる”、といった印象を受けることがある。あるいは、これはしばらく前から感じていたことだが、「生」と「死」というのは通常思われているほど明確に分かたれるものではなく、そこには濃淡のグラデーションのようなものがあり、両者はある意味で連続的であって、母親はそうした（中間的な）状態にあるようにさえ思えることがある。

「老年的超越」という考え

ところで、高齢期のころや意識のあり方について、スウェーデンのトーンスタムという社会学者が唱えた「老年的超越」という考えがある。それによれば、80代ないし90代以降の高齢者においては、それまでとは異なる意識の変化が生じ、「物質主義的で合理的な世界観から、宇宙的、超越的、非合理的な

世界観への変化」が起こるという。

そして、自分の存在が過去から未来の大きな流れの一部であることを認識し、過去や未来の世代とのつながりを強く感じるようになる。さらには、時間や空間に関する意識も変化し、死と生の区別をする認識も弱くなり、死の恐怖も消えていくといった特徴が指摘されている。

こうした点について、老年心理学者の増井幸恵氏は日本の高齢者に関する調査を行った。すると日本の場合、「超越」という点はやや薄いものの、先祖とのつながりの意識の強まりや、「あるがままを受け入れる」「自然の流れに任せる」といった、トーンスタムの議論と同様の方向の傾向が見られたという。

以上はあくまでひとつの理論なので、そのまま超高齢期の全ての高齢者にあてはまるとは言えないだろう。しかし少なくともその一部は、先ほど述べた認知症が顕著になった私の母親にも該当する面があるように感じられる。

認知症の見方を ポジティブな視点で

ちなみに関連する議論として、人間にとっての「アイデンティティ（自分が自分であること）」の重要性を提唱したアメリカの心理学者エリクソンは、生まれてから人が段階を踏みつつ成長し、自我を確立しながら成熟していくプロセスを8段階の理論にまとめたことで知られる。

しかし晩年になってエリクソンは、人間の一生には最後にもう一つの段階があると考えようになり、やはりそれを老年的超越と呼んだ。そこでは高齢期における身体的機能の低下や社会的なネットワークの減少という、マイナス面を乗り越える方向性として、老年的超越が位置づけられている。

プロフィール



広井 良典

京都大学こころの未来研究
センター教授

◆1961年岡山市生まれ。東京大学教養学部卒業、同大学院修士課程修了後、厚生省勤務、千葉大学法政経学部教授をへて2016年より現職。この間2001-02年MIT（マサチューセッツ工科大学）客員研究員。専攻は公共政策及び科学哲学。

『日本の社会保障』（岩波新書）でエコノミスト賞、『コミュニティを問いなおす』（ちくま新書）で大仏次郎論壇賞受賞。他に『ケアを問いなおす』（ちくま新書）、『ポスト資本主義』（岩波新書）、『人口減少社会のデザイン』（東洋経済新報社）など著書多数。

ここで述べている「超越」という言葉はやや抽象的に響くかもしれないが、それは「自分を越えた、より大きなものとつながること」とも言える。「より大きなもの」には「世代間の連なり、自然、地球、宇宙」といったものが含まれるだろう。

こうした視点でとらえていくと、母親は、いわば「自我」と外部の境界がゆるやかになり、そうした大きなものにつながりつつあるようにも見える。そして、認知症というものは一般的にはネガティブな側面が論じられることが多いが、そればかりではなく、ある種のポジティブな側面をもっているようにも思えてくる。認知症についての見方を、これまでよりひと回り大きな視点から考え直していくことが重要ではないだろうか。

次月号は、一般社団法人西京医師会 副会長 塚本忠司氏（京都府）の『認知症でも安心して暮らせる西京区めざして 西京区認知症地域ケア協議会の活動を通じて（仮題）』です。

本人
登場
私らしく
仲間とともに
No.194

90年生きてきたから
こそできること
がある



しお じ けい
塩路 京さん

95歳・和歌山県在住

塩路さんは、グループホームで楽しく過ごしています。若いときから字を書くのが得意で、毎年NHK厚生文化事業団「認知症とともに生きるまち大賞」の表彰状も書かれています。11月号に続いて、御坊市地域包括支援センターの谷口泰之さんによる聞き書きを紹介します。

（編集委員 松本律子）

手書きの仕事の経験が今につながって…

私は若いころに農協で働いていました。すべて文書は手書きで、少しでも字がうまく書けなかったら上司から書き直しを厳しく言われました。今思えば、この経験があったから字を書くことが得意になり、毎日般若心経を書いたり、賞状筆耕の依頼をもらったり、今の暮らしに繋がっていると思います。



真剣な表情で筆を走らせる
塩路さん

令和になって、目標は「100歳」
～若い世代とつながりたい

90歳を過ぎたとき、「平成が終わるまで生きる」という目標をたてましたが、平成が終わってしまいましたので、新たに「100歳」を目指したいと思っています。

枕で寝て過ごしたくありません。今が一番充実しています。90歳を過ぎたからといって、何もできない人のように思っで見捨てないでほしいです。90年生きてきたからこそできることってあると思うんです。そういったことを若い世代の人たちと話したい、そんな機会をつくってほしいです。

「認知症」の診断で気持ちが楽に…

今までは「しっかりしてなきゃ」という思いでしたが、認知症と診断された今は「認知症の人」と思われる方が逆に楽になりました。失敗したとき「しっかりしてたのにどうしたのかしら」という風に思われるのも嫌ですから。

挑戦したいことはいろいろ…
「あがらの総活躍希望大使」も

最近、御坊市の介護保険事業計画の策定委員として会議に参加しています。今まで経験したことのないことです。難しい話は分からないけど、とても刺激的ですし、自分の話を聞いてくれるのは嬉しいです。また、「あがらの総活躍希望大使」になり、まだ役に立てると喜んでいきます。私の姿を見て、希望を持ってもらえたら嬉しいです。



筆耕された賞状を手に笑顔の塩路さん

*あがら…和歌山県の方で「わたしたち」

【お詫びと訂正】11月号に誤りがありました。お詫びし、訂正いたします。正しくは、三浦源吾 御坊市長です。



本人交流の場

（詳細は各支部まで）

北海道●1月7日金13:15～15:30／本人の「つどい」→かでる2.7
宮城●1月6日・20日木10:30～15:00／本人・若年認知症のつどい「翼」→泉区南光台市民センター

山形●1月15日(出)13:30～15:30／本人のつどい→置賜総合文化センター
埼玉●1月22日(出)13:30～15:30／若年のつどい・飯能→飯能市市民活動センター
神奈川●1月16日(日)13:30～15:30／よこはま北部のつどい→中山地域ケアプラザ
静岡●1月11日(木)10:00～11:30／若年のつどい→富士市役所
和歌山●1月9日(日)13:00～15:00／若年

性認知症交流会→ほっと生活館しんぼり
広島●1月8日(出)11:00～15:30／陽溜まりの会広島→中区地域福祉センター
徳島●1月15日(出)13:30～15:30／縁の会→県立総合福祉センター
愛媛●1月28日(金)13:00～15:00／若年のつどい→県在宅介護研修センター
長崎●1月18日(木)13:30～15:30／本人のつどい→ささば市民活動交流プラザ

新型コロナウイルス感染の影響により、変更ないし、中止となる可能性があります。

会員さんからの お便り

このコーナーに寄せられたお便りの他、入会申込書、
「会員の声」はがき、支部会報から選び掲載しています。

お便りお待ちしております！

〒602-8222 京都市上京区晴明町811-3
岡部ビル2F
〈「家族の会」編集委員会宛〉

FAX.075-205-5104

Eメール office@alzheim.or.jp

facebookで全国の仲間と気軽に交流で
きる「家族の会」会員限定のサイトです。

アルン
alun
alun

にいただきました
お便りをご紹介します！

アルン
alun
alun

ぼーれぼーれ 11月号
「予期せぬアクシデント」を読んで

「認知症だから」が理由ではないと感ず

●Aさん 女性

ご家族としてはとても心配な出来事でしたね。私の勤める施設でも同じように搬送してもらえないことがありました。私は元々医療従事者なので、わかるところでお話ししますと…。

救急隊も二次災害を防がなければいけないのです。ご本人が嫌がって抵抗する力がある以上、ストレッチャーからの転落の危険、救急隊が怪我をすることもあります。そういったことを防ぐためには、「ご本人の同意」が必要になるわけです。運ばない判断に至ったのにはおそらくもうひとつ理由があり、命の危険性があると判断されなかったこともあるのではないかと思います。

ひとりでも多くの傷病者を救急隊も助けたいと思っておられるとは思いますが、そういった事情もあり、搬送を断念されたのではないのでしょうか。救急隊にとっても簡単な決断ではなかったと思いますよ。

認知症でなくても、アルコールが原因で同じような状況になる方もおられます。それを考えると「認知症だから」が理由ではないと私は感じています。家族の立場としては、どんな状況であっても心配なので、運んでもらって診てもらいたいのが本音ですね。もっとちがうルールができるといいですね。

アルン
alun
alun

ぼーれぼーれ 11月号
「予期せぬアクシデント」を読んで

介護者の主張は重要

●Bさん 男性

判断能力が低下している人は付き添い保護者とふたりでひとり。介護者の主張は重要だとは思いますがね。

アルン
alun
alun

ぼーれぼーれ 11月号
「予期せぬアクシデント」を読んで

納得いかない話ですね

●Cさん 女性

認知症になると、ちゃんとした治療もしてもらえないのですかね。判断能力が低下している方に、「本人の同意を…」なんて、それでいいのでしょうか？



本人に合わせた生活

●千葉県 Dさん 80歳台 女性

80歳台、要介護1の夫を介護しています。介護は毎日が本人に合わせた生活で、戸惑ったり、自分が精神的におかしくなったりして、なんとかしなくてはと思っていました。介護者のつどいの会に参加した時に「家族の会」に入会して、いろいろな人のご意見をお聞きして気持ちを和らげることができたら…と思いました。



母のことを理解してくれる第三者が必要

●京都府 Eさん 40歳台 女性

父が咽頭癌で亡くなる1年前位から、父が入退院を繰り返すたびに、母は突然怒りだし、暴言を吐くことを繰り返していました。ターミナル期に入り、父の希望通り在宅で看取ることになった時には、一気にパニック状態になり、暴言暴行をおこすようになりました。本人抜きで精神科医に受診し、経過と言動エピソードを伝えたところ、アルツハイマー型認知症と診断されました。妹は母の状況を受け入れてくれず、父のターミナルも受け入れてくれなかったのが、在宅看護は私ひとりで行いました。

不穏な状態がわかってから、地域包括支援センターに繰り返し相談しましたが、母の担当になった方は、母の要望のみで行動され、この7年介護保険の更新切れを繰り返して今に至ります。電話相談で認知症初期集中支援チームに相談するように言われましたが、コロナ感染が広がり、面談できないままになりました。母は担当者に勧められた体操教室に参加しましたが、スタッフに対する不信感が強く、被害妄想で参加拒否になっています。担当者は母が認知症であることを理解できていません。本人がこの数年ケアハウスに入ると言い続けていますが、聞き流しているようです。料理は同じメニューを繰り返すことはありますが、日の管理はでき、洗濯と仏壇の管理もできています。同じものを買う、賞味期限がわからないことは私がフォローし、掃除も私がしています。大きな問題なく過ごしていますが、正直一緒に暮らすことは苦痛でしかありません。施設入所を勧めてほしいのに、担当者がかかわらない限り無理だと思っています。私自身看護師として働いており、患者さんのことだと認知症状や不穏行動も冷静に判断できるのですが、母にはそんな対応ができません。母のことを理解してくれる第三者がいてくれたら、どんなに幸せかと思います。このまま認知症が進行してからの対応を待つしかないことに孤独を感じます。

直接面会ができました

●宮城県 Fさん 70歳台 女性

10月、コロナ感染状況がレベル1になり、主人がお世話になっている施設も予約制でシールド越しの面会から、居室で直接面会できるようになりました。

前回直接あったのがいつだったかも分からない程だったので、今回直接会うことができ、身体にふれ、手を握ることができてとても嬉しかったです。

主人はシールド越しでも、直接でもあまり変化はありませんでしたが、手を握って「あったかいやろ」と聞くと、にこっと笑って「じゃあね(そうだの意)」と言ってくれ、しばらく握っていたら、こっくりこっくり居眠り…。人の温もりが気持ち良かったのですね。とても心が軽くなって施設を後にしました。

施設との関係の持ち方は？

●群馬県 Gさん 女性

義母は去年胆管炎が判明し入院しました。今年に入りたびたび熱を出し、入退院を繰り返すため、施設入居の方が良いとの医師の判断で先月半ば、20人ほどの入居者の小規模の介護施設に入りました。ショートステイをしていたところと同じ経営なのと、その時の担当者がケアマネジャーになって下さるということで、一時的には安心しました。ただ、ショートと違い、ずっと生活する場に義母を預けるという経験がないので、戸惑うことが多いです。

義母は今までとは違う環境に慣れ安定していますが、家族のほうは施設側とどう関係を持っていっていいかわかっていると感じています。

※お名前はイニシャルではありません。
年齢は「50歳台」等で表記しています。